

本校の卒業生2名が、母校で教育実習を行っている。期間は、一人が音楽で2週間、もう一人は英語で3週間である。実習初日にお二人から、いろいろなお話をうかがった。

教員を目指すきっかけは、音楽の実習生は、10年前の東日本大震災だったそうである。あのときの小学校の先生方の姿を見て、音楽の教員を目指すそうと考えたとのことだった。英語の実習生は、中学校時代の恩師の影響だそうである。中学校のときには、英語ができると思っていたのが、高校に進み、英語ができなくなった。それを高校の英語の先生が救ってくれたのも大きいそうである。どちらも教員になったら、ぜひ児童生徒に話してほしいエピソードである。

お二人の話を聞いているうちに、もうだいぶ昔のことになるが、自分の教育実習時代が蘇ってきた。私は、小学校で教育実習を行った。期間は6週間だった。あの頃は、そうだった。正直に言う。最初の2週間はよかった。だが、次の2週間は中だるみだった。さすがにラスト2週間は、またスイッチを入れ直したことを覚えている。

配属されたのは、幸か不幸か小学3年生だった。3年生と言えば、ギャングエイジである。非常に活発である。休み時間になると、「遊ぼう、遊ぼう」とやってくる。いきさつは忘れてしまったが、週末には私の家にまで来て遊んで帰っていった。かくれんぼが始まり、洗濯機の中にかくれている子もいた。エネルギーである。

数年が経過し、教育実習のときの一応教え子というべき子が教員になっていた。会うと、ちゃんと覚えてくれていた。小学3年生の、しかもたったの6週間の話である。よく覚えているものである。何だかわからないが、あの子たちにとっても、私にとっても中身の濃い6週間だったのだろう。

教育実習でお世話になった学級の先生ではない、同じ学年の違う学級の先生とは、自分が教員となってから何度かお会いする機会があった。こちらもちょうど覚えてくださっていて、声をかけていただき、ありがたく思ったものである。たった6週間しかいなかった、それも違う学級の教育実習生を覚えているのだから、ありがたいとしかいいようがない。

さて、本校の教育実習生だが、お二人とも初日の礼儀やあいさつからしっかりしており、感心させられた。どうも今の若者はちゃんとしている方が多い。なぜだろうか。小学校と中学校の教育がよかったのだろうか。そういうことにしておこう。

お二人とも、決して広き門ではない教員採用試験に立ち向かう。ぜひ、難関を突破して、故郷、福島県のために力を発揮してほしいものである。きっと、この2週間、3週間の経験は、今までの22年間の人生にはなかったものになっているはずである。まだまだ未熟な、それでいて無限の可能性を秘めた中学生を、生身の人間を相手にしているのである。本を読んだり、人の話を聞いたりしただけでは得ることができない尊いものを、お二人とも自分ものとしているはずである。

母校に7年ぶりに戻り、中学時代とは違って、今度は教壇に立っているというのは、どんな心持なのであろうか。明日にでも聞いてみよう。きっとまた、いい話をしてくれるに違いない。